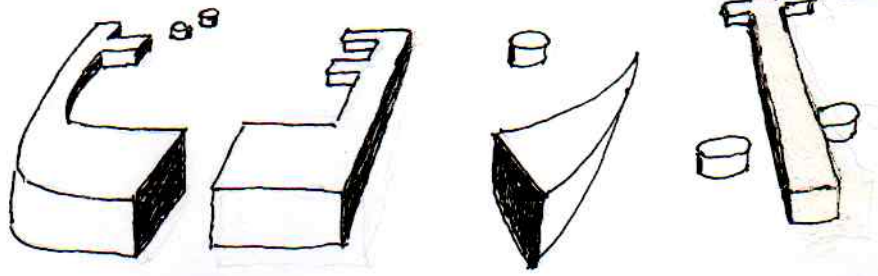


①

212号



通信

2023年9月30日
編集 荒川勝巳

P.O. box 10 Kitengela 00242 KENYA
メールアドレス: sfoarakawa@yahoo.co.jp

こちらは4月下旬に雨季が終ると、またこの9月まで雨がまったく降らなくなりました。庭の根の浅い低木へ水やりしていても枯れてきていました。ところが9月12日の学校終了時に突風が吹き荒れる。そして子どもたちのツメの大きさをヒョウが、ドドドドドと地面や建物へ打ち当る。あわてた児童たちは校内を逃げまじい、教室の奥へ閉じこもる。ヒョウの降りには数年ぶり。それにつづく土砂ぶりの雨。晴れ間が出るまでの一時間弱の出来事だったが、気候のこわさと憂いを知ったひとときでした。

よく日は薄曇りのおだやかな日で、午後から私は枯れはた庭の低木跡へ新しい苗を植えました。ちようど児童たちが昨日のヒョウ降りて出たおびたらしい落葉をほうきではき集めていたので、庭の低木へ落葉でマルチをしてもらいました。

▼大統領選挙後の混乱▲
昨年8月におこなわれたケニア大統領選挙でルト候補

は僅差でライラ候補を敗つて大統領の座についた。ところがライラ候補はこの選挙後にルト候補は選挙違反を訴えた」ということを国民に訴えた。この訴えは今年の前半までつづき、そのあいだにライラ氏とその支援者たちはデモをおこない、それが暴動へと発展。そういうことが全国でなるとなく繰り返され、そのたびに警官隊が出動し、合計数十名のデモ暴動参加者が死亡。

そしてこの6月にケニア政府は財政難解決のために、国民への3%の増税を課した。ただでさえ物価高とうに苦しむ国民はそれでもっと生活苦をいられることに。すると今度はライラ氏が「税率引き上げ反対」とデモの理由を切り換えて、さらにデモ暴動を起した。

ここ最近両氏は対話をこころみているのでデモ暴動が



なくなつた。しかしこの対話が決裂すればまたデモ暴動が起ころうから、今後もよたんを許さない状況がづづいている。

▼キテングラでの暴動▲
7月中はの午前中に、私はキテングラ市の街中にある銀行で多額のお金をおろして外出した。すると市を二分する大きな舗装道路を数台のバイクがハイスピードで走り抜け、それが周囲の人々が視線を送り騒然としている。それで私は「ああ、今日は全国的に税金アップを反対するデモの日だ」ということを思い出した。

キテングラ市はナイロビと比べると小さい、あまりデモなどのない平和なところだったので、たいしたことはないだろうとたかをくくっていたのだが……

デモ暴動に巻き込まれないようこの道を横切り帰途につこうとした。するとこの道路の街の中心方向から暴徒の先導らしき若者が10名ほど急に現われた。彼ら

は大きな石を路肩から道路中央へまいたり、古タイヤをいくつも燃して煙を出させはじめた。近頃の大きくなれいなジョージングモールの開いた鉄ゲートへ石を投げているように、ガンガンと打ち当る音も聞えてくる。そのうちの一人は道路を横切ろうとしている私を見つけると「ムズング(外国人)はなんとかと叫びながら、こちらを指している。

道路封閉



② 私はあわてて逃げようとしたが、道路を横切った路肩の向うは補助道路になっいて、この補助道路までは2mおちこんだ急斜なので、階段のあるところまで路肩を進まないといけない。私はこわごわしながらも彼らを見ないようにして、芋虫のようにゆくり(まだヘルニアが完治してない)路

肩を前に進んでいった。

ようやく補助道路へ下りる階段を渡り終えると、この補助道路にいたバイクタクシーの運転手や露店の人々は暴徒たちに驚きあきれながら、これかういったいなにか始まるのか興味しんしんで見守っている。私はそんな余裕なく迂回しながら、あわてて住宅街の中へ飛びこんだ。住宅街の道端でいっついて、暴動場所から100mと離れていないのに、これも世界が違ふものかとみまうに感心。

その後私は昼に無事プロジェクトへたどりつく。ガイニングにあるテレビではナイロビとキテナケラの暴動の様子が2元中継されているので、スタッフ・先生たちはこの暴動のことを知っていた。そして警官の銃の音らしきものがしもうちゅう遠くから響いてくるようになる。午後3時には暴動による死者がキテナケラだけで2名出たと知らされた。

が初めてだったので(私は生れながら2度め)だったので心穏やかではないようだ。

先生たちは下校時の児童を気遣い、保護者が迎えにくるまで待たせることに。

後日、私が聞かされたことは「デモ暴動参加者はトラックで別の地域から運ばれてきたとのことだった。

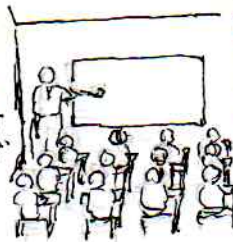


▼イザベラ、大学からもどる▲

ケニア西部の大学で経営ビジネスを学んでいたイザベラが、6月にその大学からプロジェクトへ戻ってきた。この年末には卒業でもう授業がないというた。卒業までは就職活動以外にすることがないとのことなので、スタッフ宿舎の一室を彼女にあって、施設の子どもの夕方からの自習手伝いをしてもらう。

そうしたところ小学8年生の担任の先生が辞職したので、その先生の代りをイザベラにし

てもらうことにした。それも当初私たちは新しい先生を雇うまでと考えていたが授業の進め方が辞めた先生よりがっとうまい。今年末卒業の8年生なので、コロコロ先生を替えては授業に身がはいらない。それで今年末まで彼女に先生をしてもらうことになるだろう。



▼マリア再び▲

8月10日でサイテラフラムの学校は2学期を終り、同じように高校も半月の休暇にはいっただので、施設の子どもたちの多くが親せきへ一時的に帰っていった。しかし帰える親せきのないサーラ(仮名)や高校生のジェリダ、モリーンはそれ以外の都合で施設へ残る。そこから9月からプロジェクト近くにある職業訓練センターへ入学する予定のマリアがその準備のために親せきのところから戻ってきた。

もういなかで、最近ご寄付
でいただいた毛布を施設の子
どもたちに使わせるため、いまま
で使っていた毛布を、補習授
業のあるサーラ以外のジェリ
ダ、モリーン、マリアに洗わせて、

いつかまた使えるように倉庫
へしまわせようとした。ところが
これら3名は毛布を「自分たち
が使うものではない」という理由
で洗わず昼寝したとのこと。私
はこの話をモリア寮母から聞いて
てがく然とした。これら3名は
親せきではないあかの他人である
日本人やケニア人に助けられて施
設で育つたのに、そんな利己的
なことを言うとは。それで私は
彼女たちが「成育したいまま自
分の状況に気づいていないのだ
」と考えた。

ただジェリダとモリーンはまだ
高校生なのでこちらが面倒みな
ければいけないし、彼女らの親せ
きはこちらが求めればプロジェクト
トへ来るので、一緒に意見すれば
気づかせることが難かしくはな
い。しかしマリアはすでに高校

③ を卒業しサイディアフラ
ハをいったん出た身。そ

して親せきはこちらへマリアを預
けつはなしで、彼女に問題があっ
て話しあおうと噂んでも来よう
としなかった。こういう非協力的
な親せきの子どもはこちらが理
をつくして状況を気づかせようと
してもうまくゆきがない。

毛布洗い



そこで私はマリアへ「君を責任
もって面倒みてくれる親せきを
1名、9月の訓練センターがはじ
まる前までにプロジェクトへ連れ
てきなさい。もうでもしな限り
君を訓練センターへ入学させる
ことができない」と厳しく伝えて
親せきのところへ帰らせた。
9月はじめにマリアはおばさん
をつれて戻ってきた。それに応対
した私とタミスさんはおばさん
へ「マリアは彼女のいまの状況に
気づいていません。しかしあなた
がいま住んでいる近所で訓練
センターを探したらマリアの面
倒をみれば彼女はそれに気づ
き、まじめに技術を身につける
でしょう。私たちは学費をその

訓練センターへ払います。もしそ
れができないようならマリアは
施設から近所の訓練センター
へ通い、彼女が問題をなおした
ときに、あなたは解決のために
こちらへ来てください」と二者
選択をせまった。するとおばさ
んはマリアの面倒をみるほうを
選び、マリアといっしょに帰って
いた。

9月下旬の段階ではおばさん
はまだ近所の適当な訓練セ
ンターを探し出せずにいる。9
月にならば新たに訓練センター
を探すとすると入学が間にあ
わないうこともあり、来年はじめの
入学になるかもしれない。それで
私たちは来年はじめまで訓練
センター探しの期間を延長す
ることにした。

この時私は「彼女たちは自分
の状況に気づいていない」と考えた
わけだが、高校生たちにはこのこ
とについて、他にも思いあたるふし
があった。

この8月下旬にサイディアフラ
ハワークキャンプに参加したNさ
んは7日間ではあったが、施設



この1、2年の施設高校生たち
名は平日の学校授業が早朝
から夕方までみっちりある。晩
や土、日曜は休日だが、宿題を
たくさんこなさないといけない。
こちらも仕がしかったり病気に
なったりで、あまり彼女たちへ
かかわることができずにいた。
私は病気がある程度回復
したこの5月になると、彼女ら
へ目がいき届くようになり、彼女
らが年齢のわりに「社会性」が
育ってないことが気になった。
そこで「社会性」を身につけさ
せようと、土曜の午後から1時
間「社会奉仕」と銘うって、これら
高校生を中心に施設の子ども
たちへ、プロジェクト敷地内のゴミ
拾いやドブさらいをやらせた。

▼高校生とNさん

すると彼女らはそれらの作業を不満そうにガラガラとおこなう。これらのことでは「親せきを呼びよせて高校生たちへ注意してもらうのもいいのだが、今年のはじめに別件でそれをしてるので、もつと別件からも注意してあげては」と思者を含めぐらす。そこで思いついたのが「年齢の近いNさんやイガバラに注意してもらおう」というアイディア。これはワークキャンプのNさんにとってもよい経験になるだろう。「荒川やガマリスさんのように上から目線ではなく、お互いの考えを出しあおう」と的を話しあいにしては」とNさんと私とで打ち合せをする。ちやうど親せきから戻ってきたもう一名の高校生アチェンや小学生も含め、話しあいをしてもらった。

Nさんたちの話しあいはうまくいったようで、その後の土曜のゴミ拾いは子どもたちの不満そうに「……」がけられなかった。そしてNさん提案で「子どもたちに日記を書かせては」とのことだったので、それいまま実行している。

多感な時期の高校生たちはこれかような種々の問題を起すだろうから、そういう時でもまた異なる人から意見やアドバイスをもらうしてもどうしようにしたい。書庫の米俵をラップした教科書がラップで包まれたり、児童用もキニールは子ども用には子キニール



7月8日は日本から6名の訪問者の才があり、そのうち以前からの支援者Kさんより、20冊以上の英語絵本とクレヨンなどをこちらまで運んでいただいた。これらの絵本は昨年私が9月末に別の支援者の方からいただいたもので、私はほかの荷物があつてそれらの半分しかこちへ運ばず、残りの絵本を支える会「運営委員」の横山さん宅で預かってもらっていたもの。このKさんには絵本を詰めこんでくれたのと同じバツグに、日本で販売する工房製製品や民芸品を運んでいただき、再度助けていたたく。

サイダイヤフラ「運営委員」のテニス氏は英語雑誌を、私は古英字新聞をそれぞれ持ちよつたので、図書室の書棚はある程度英語の読みものかそろつてきている。そこで先生たちには「クラス週2回、低学年に読み聞かせ(幼稚園年中組から小学3年まで)高学年に読書会をしよう」と期間割りを組んで実施してもらっている。

私たちが10年前に学校を開設したときには、保護者から児童の教科書を買ってもらつたことにはしてない。しかし低所得者層である保護者たちは教科書を買おうとしなかつた。そのため児童たちの成績はこんにちいたるまで、いまひとつ伸びがよくない。そこで私と「支える会」でその点を考慮し、この3学期がはじまる前まで(3学期は8月28日より始まった)英語、算数、理科、社会、スワヒリ語などの教科だけでも、そして高学年だけでも、4名に1冊はいまわらるようにした。それら教科書は2学期終了近くにある保護者会以前に、ガマリスさんにより安めに購入できるナイロビでまとめ買いしてもらった。

この保護者会では保護者たちから「うちの子は成績が上がりました」とか「うちの子は英語を話せるようになった」という声がいくつも聞かれた。そこへもって私たちは児童用の新しい教科書を保護者たちへたくさん見せたので、彼らの喜びようはひとしおであった。

▼卒業生、有志と訪問施設開設と同時に入ってきた子どもカゲ(35才男)はいまキケンケラに職をもち、家族と暮らしている。その彼は7月16日(日)にケニア人有60名ほど募つて、プロジェクト訪問。彼と同時期施設にいたサボレ(33才男)はこの時プロジェクトに滞在して活動を手伝っていたが、彼も訪問者の方たちをサポート。そしてガマリスさん、イガバラ、テニス氏も加わり、訪問者の方たちとプロジェクト活動について熱心に語りあった。